

# ヨルダン南部ショウバック北地域における第3次分布調査（2012年春季）

山藤 正敏

日本学術振興会特別研究員（PD）／国際文化資源学研究中心 客員研究員

## 1. 派遣日程・訪問先

派遣期間は2012年3月26日から5月2日までの38日間であり、ヨルダン・ハシミテ王国南部、マアン県に所在するショウバックを基点として、周辺地域の分布調査を実施した。本調査は金沢大学とフセイン・ビン・タラール大学による合同調査である。以下では今季調査成果の概略を報告する。

## 2. 調査の概要

ショウバック北地域考古学プロジェクト（Shawbak North Archaeological Project: SNAP）（団長：藤井純夫 金沢大学教授）は、死海地溝帯沿いの丘陵地帯を調査対象地として、同地域の文化史全般を明らかにする目的で、金沢大学と現地のフセイン・ビン・タラール大学により2010年以来共同で実施されてきた。本プロジェクトの実施期間は2010～2017年の7年間であり、分布調査を行うフェーズ1（2010～2012年）と、分布調査により確認・登録された遺跡の発掘調査を行うフェーズ2（2013～2017年）から成る。したがって、本年はフェーズ1の最終年度にあたる。

これまで、予備調査を含めて4シーズンの分布調査を実施してきた。予備調査は2009年夏季に実施され、旧石器時代の石器散布地、先土器新石器時代B期（PPNB）の逗留地、ケルン墓群、そしておそらく主にナバテア時代に利用されたであろう集落址等が確認され、当該地域が文化的・歴史的にある程度の厚みを有していたことが再確認された。続く第1次調査（2010年夏季）は第1地区北半に焦点を絞り、少なからぬ数のナバテア時代の痕跡が記録されている（Fujii et al. 2011）。第2次調査（2011年夏季）は対象地域西端崖面上（第4・7地区）に沿って実施され、結果として既知の3地点を含む16地点の登録に至った（Fujii et al. 2013; 藤井他 2013）。今季調査では西半部（第2・

4・6地区）を主な対象として踏査を行い、計81地点を確認・登録した。したがって、これまでの踏査で総計97地点が登録・記録されたことになる（註1）。

## 3. 対象地域の自然環境的特徴

本調査の対象地域は、死海から約47km南南東に位置する死海地溝帯東側断崖上縁部の陥没した丘陵地帯であり、海拔標高約900～1500mを測り、最大で南北12.5km、東西12.5kmの範囲を占める（図1）。対象地域の北にはカラク・タフィラ高地（Karak/Tafila plateau）が隣接し、南にはワディ・ムーサ（Wadi Musa）の丘陵地帯が連なる。また、東にはステップ及びフリント沙漠（Hamada）が広がり、また、西には死海地溝帯下に傾斜する急峻な丘陵地とその下にフェイナン川（Wadi Feinan）流域の低地が位置していることから、多様な自然環境の結節点に位置すると捉えられる。

対象地域は、以下の自然地形により境界づけられる。北縁では、調査地北に隣接するダーナ自然保護区（Dana Natural Reserve）の南を縁取る比高差約100mの断崖が長さ9kmに亘って境界を成し、死海地溝帯東縁の急峻な丘陵地に接続している。東縁から南東縁にかけて比高差約60～90mのフジャジェ断崖（Fjaje escarpment）が切り立っており、断崖を上がりきると東側に向かって緩やかに傾斜しながらステップ地帯並びに東部沙漠が広がっている。また、西縁では、西側の死海地溝帯に向かって急激に下がる崖線が縁取っている。これらに対して、南縁では断崖は認められず、南北に流れる小河川の下刻作用により形成された小渓谷の両岸に、比較的緩やかな傾斜面が東西に連なっている。

調査地域内は全体として、北東から南西にかけて標高が徐々に上がっていく地形を呈しており、主な河川もこの方向に沿って流れている。調査地域をほぼ南

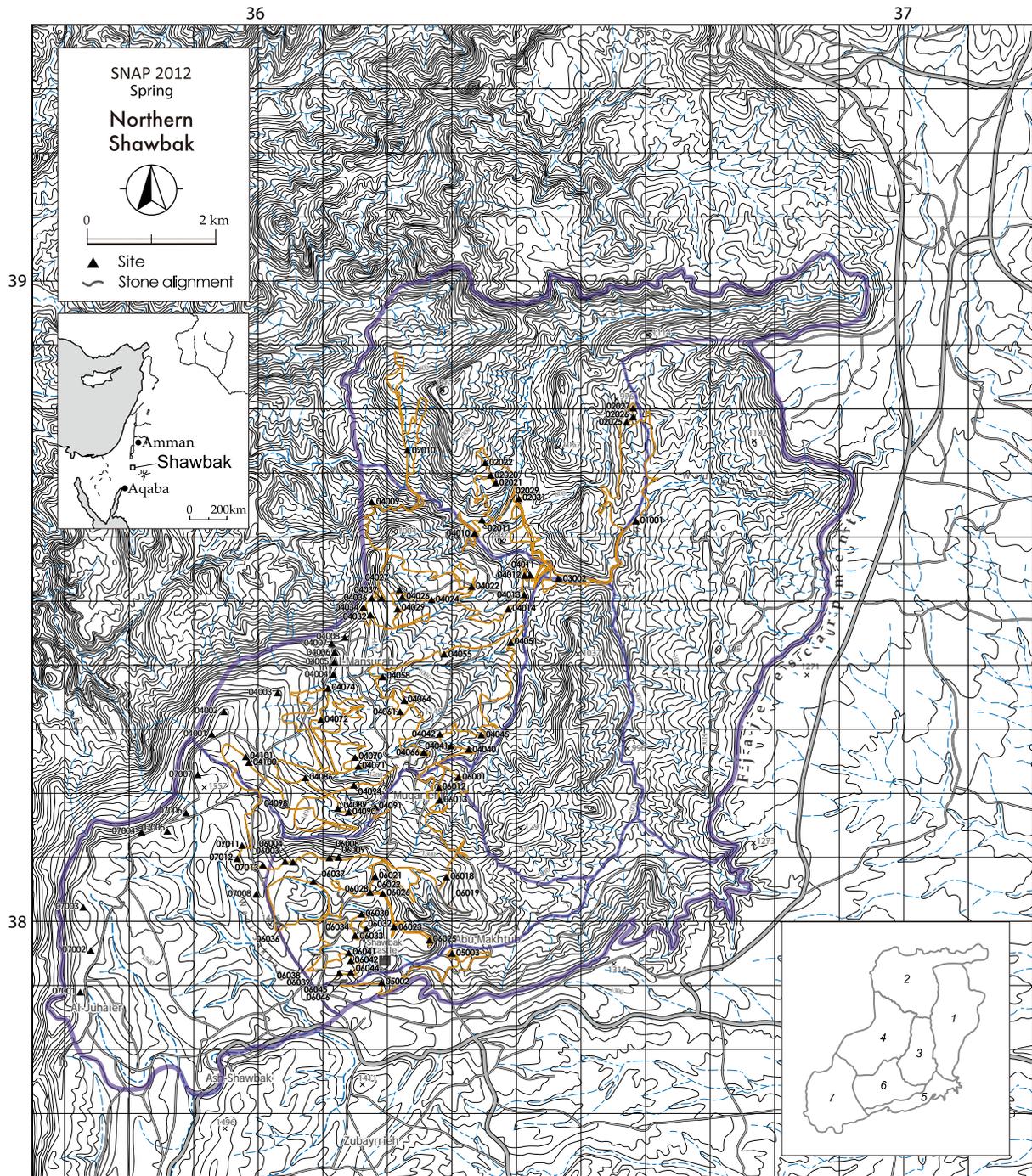


図1 遺跡分布図（地域内の淡色ラインは今季調査行程を示す）

北に貫流するタルタル川（Wadi Tartar）とブスタン川（Wadi Bustan）は、北側で調査地域を東西に横切って東に向かって流れるナヘエル川（Wadi el-Nakheel）に接続し、死海地溝帯下のフェイナン川流域低地に流れ込んでいる。ナヘエル川以北では、同河川に北東方向からアフマル川（Wadi Ahmar）が合流している。比較的小規模であるシャウケレイア川（Wadi Shauqeria）は、ムカライエ村（Muqarieh）付近でブスタン川に合流しており、現在でも流水が認められる。

地中海から到来する湿度の高い空気が死海地溝帯東縁の急峻な高まりに遮られて降雨をもたらすため、同地溝帯東縁に沿って死海南端から南に約 100 km、東西幅 14 km の細長い範囲で年間平均降水量が 200 ～ 300 mm に達しており、コムギの天水農耕が可能である。因みに、ショウバックは、年間平均降水量 298.3 mm、年間最高気温 25.6 °C、最低気温 -1.4 °C であり、亜乾燥地中海性気候（寒冷種）に分類される（UNESCO 1996: 30-39）。こうした気候と併せて、テラ・ロッサ

(Terra rossa) やレンツィナ (Rendzina) といった植生繁茂に好ましい土壌の堆積により、以前はヒノキ科ネズミサシ属 (*Juniperus phoenica*) やブナ科 (*Quercus coccifera*) 等の森林と低木類が卓越していたようであるが、現在ではマツ科、ブナ科、オリーブ等が多く植樹され、地表には低木類が繁茂している (UNESCO 1996: 42, 62-70)。一方、フジャジェ断崖を越えて東に下ると年間平均降水量は 100 mm を切り、草本類の疎らな生育が見られるステップ気候に属する地域が広がり、さらに東の沙漠地帯 (東部沙漠) に至る。

現在、調査地内にはマンスーラ村 (Mansurah) やムカライエ村といった定住村落が点在しており、周辺の平地地及び緩斜面は天水による耕作地やオリーブ畑として利用されている。また、特に北半の比較的急峻な丘陵地帯においては遊牧民のテントがしばしば見られ、ヤギ・ヒツジの放牧が営まれている。

#### 4. 調査略史

当該地域及び周辺では、本プロジェクト開始以前に幾つかの調査が実施されてきた。1980年代には、前期をはじめとする旧石器時代の石器散布地の存在がフジャジェ断崖沿いで認知された (Rollefson 1981a/b, 1985)。最近では、南隣のウンム・トゥイラット (Umm Tuwyrat) でドルメン群が記録され (Dubis et al. 2004; Scheltema 2008)、ヒルベト・エツ＝ダツバ (Khirbet ed-Dabba) 周辺では鉄器時代の諸遺跡が確認されている (Whiting et al. 2008, 2009)。より広い範囲に目をやると、ショウバック北地域の北方に位置するタフィラ (Tafila) とブセイラ (Busayra) 周辺では、マクドナルドらによる考古学踏査が行われており (Macdonald et al. 2004)、また、さらに北のカラク高地 (Karak plateau) においても 875 km<sup>2</sup> という広範囲を対象とした踏査が実施されており、銅石器時代からオスマン朝時代に至る多数の各種遺跡が登録・記録された (Miller ed. 1991)。調査地の南方、ペトラ (Petra) 周辺の計 1460 km<sup>2</sup> に及ぶ丘陵地では、考古遺跡を登録・登録することを主目的とした踏査が実施され、前期旧石器時代からオスマン朝時代に亘る数百もの痕跡が確認された (Macdonald et al. 2010, 2012)。ヨルダン渓谷断崖を西に下ったフェイナン川流域では、1980年代から2000年代にかけて発掘を伴う継続的な調査が実施され、土器新石器時代から鉄器時代にかけての各種痕跡、並びに、前期青銅器時代及び鉄器時代の銅製錬場址が検出

された (Levy et al. 1999, 2001, 2002, 2004)。

#### 5. 調査方法

踏査をより円滑に進めるために、対象地域を7地区に区分した (図1)。各地区は、主に河川を境界として区分されているが、第7地区と第4・6地区、第6地区と第3地区の境界のみ地形に従い任意で設定した。

上記の地区を基本単位として、週5日、朝7時から17時頃まで全行程徒歩による踏査を実施した。調査地域は概して起伏に富み、幾多の大小涸れ谷 (ワディ Wadi) による開削を受けている。このため、基本的にはワディ間の台地を1つずつ訪れ、蛇行して進んでいく行程を選択することで、人間の活動痕跡が残されている可能性がある立地を網羅することを目指した。

踏査に際しては、GPS受信機 (Garmin社製 GPS map 62s) を携行し、調査日毎に全行程を記録、また、遺跡の位置情報を個別に記録・登録した。なお、遺跡の座標情報は世界測地系 WGS84 に依拠している。行程中遺跡を発見した際は、遺跡の立地・微地形等の周辺情報の記録、散布遺物の表面採集、遺跡の全景・遠景写真の撮影、また、外縁と思われるラインに沿って歩行してトラックデータとして範囲を記録する作業を

表1 ヨルダン南部における時代区分

時代	略記	年代 (較正年代)
前期旧石器時代	LP	1400,000 B.C.E. - 180,000 B.C.E.
中期旧石器時代	MP	180,000 B.C.E. - 45,000 B.C.E.
後期旧石器時代	UP	45,000 B.C.E. - 22,000 B.C.E.
終末期旧石器時代	EP	22,000 B.C.E. - 9,600 B.C.E.
先土器新石器時代A期	PPNA	9,600 B.C.E. - 8,700 B.C.E.
先土器新石器時代B期	PPNB	8,700 B.C.E. - 7,000 B.C.E.
土器新石器時代	PN	7,000 B.C.E. - 5,000 B.C.E.
銅石器時代	Chal	5,000 B.C.E. - 3,600 B.C.E.
前期青銅器時代Ⅰ期	EB I	3,600 B.C.E. - 3,100 B.C.E.
前期青銅器時代Ⅱ期	EB II	3,100 B.C.E. - 2,700 B.C.E.
前期青銅器時代Ⅲ期	EB III	2,700 B.C.E. - 2,300 B.C.E.
前期青銅器時代Ⅳ期	EB IV	2,300 B.C.E. - 2,000 B.C.E.
中期青銅器時代	MB	2,000 B.C.E. - 1,550 B.C.E.
後期青銅器時代	LB	1,550 B.C.E. - 1,200 B.C.E.
鉄器時代Ⅰ期	Ir I	1,200 B.C.E. - 1,000 B.C.E.
鉄器時代Ⅱ期	Ir II	1,000 B.C.E. - 539 B.C.E.
ヘルシア時代	Per	539 B.C.E. - 332 B.C.E.
ヘレニズム時代	Hel	332 B.C.E. - 63 B.C.E.
ナバテア時代	Nab	63 B.C.E. - 106 C.E.
ローマ時代	Rom	63 B.C.E. - 324 C.E.
ビザンツ時代	Byz	324 C.E. - 640 C.E.
前期イスラーム時代	E. Isl	640 C.E. - 1099 C.E.
中期イスラーム時代	M. Isl	1099 C.E. - 1517 C.E.
後期イスラーム時代	L. Isl	1517 C.E. - 1917 C.E.

表2 地区別・種類別登録遺跡数

SNAP11&12SPR.	Area 1	Area 2	Area 3	Area 4	Area 5	Area 6	Area 7	Total
Settlement	0	0	0	0	1	0	3	4
Artifact scatter	0	4	1	24	0	6	6	41
Tumulus	0	2	0	2	1	6	1	12
Structural remain	1	3	1	12	0	9	1	27
Stone alignment	0	1	0	3	0	10	0	14
Others	0	0	0	1	0	1	0	2
<b>Total</b>	<b>1</b>	<b>10</b>	<b>2</b>	<b>43</b>	<b>2</b>	<b>28</b>	<b>11</b>	<b>97</b>

現地にて行い、宿舎に帰着後は QGIS (Quantum GIS) を用いて行程と遺跡位置を表示の上、遺跡規模や遺跡間の距離の測定等を行い記録した。遺跡データの管理はファイルメーカー (FileMaker) により行い、基幹となるデータベースとして今後も活用していく予定である。

遺跡情報の記録と同時に、現地では遺物採集も重要な作業である。遺物の採集はグリッド・システムに依らず、任意に行った。参加人数が少なかったこともあり、面的に徹底した表面採集を行えなかったが、比較的少数ながらも、土器の口縁部・底部・把手部等や石核等、時期決定に有効な部位・器種はもちろん、時期判別が可能な土器胴部片も少なからず採集した。なお、宿舎ではこれらの資料のカウントを時期別に行い、遺跡の時期決定の参考とした。

最後に、当該地域における時期区分は、イスラエルやヨルダン北部で用いられる文化編年に従っている。同時期区分の詳細は表1に示す通りである。

## 6. 春季調査の成果

今季調査においては計 191 地点において人為物を確認・記録したが、このうち 110 地点で円形石積 (群) 及び石壁遺構のみが認められた。これらの遺構は機能・時期共にあまりにも不明瞭であり、比較的新しい時期に行われた畑地開墾の際の寄せ石や土砂流出防止用石壁である可能性も否定できないことから、本報告における登録遺跡からは除外する。したがって、今季調査においては、計 81 地点が確認・記録されたこととなり、前回既調査の計 16 地点を併せた総計 97 地点を対象として、以下では全体的な傾向について押さえていく。

まず、地区別の遺跡分布について、今季重点的に踏査を行った第4・6地区では計 71 地点が確認・記録されており、全体の 70% 強を占めている (註2) (表2)。他の地区ではいずれも遺跡が少なく、確認遺跡数が踏

査密度に比例する状況が窺えた。

また、踏査時の採集遺物に基づいて、遺跡数の時期別変遷には明確な傾向が看取された (図2)。まず、中・後期旧石器時代、終末期旧石器時代、土器新石器時代、銅器時代、中・後期青銅器時代、鉄器時代 I 期、ペルシア時代、及び前期イスラーム時代を除く、前期旧石器時代 (アシューリアン) から後期イスラーム時代 (オスマン朝時代) までの遺物を断続的に採集できた。中でも、ローマ時代と鉄器時代 II 期の遺物は 50 以上の地点で採集されており、両時期に調査地域での活動が活発化していたことが推測される。これらのピークの合間に、前期青銅器時代、ヘレニズム時代、ナバテア時代、そして中期イスラーム時代の痕跡が少なからぬ地点で認められた。なお、16 地点からは時期の特定できる遺物が採集されず、利用時期は不明である。

遺跡の種類に着目すると、当該地域の特色をさらに理解することができる。種別としては、居住地・逗留地、遺物散布地、矩形・円形遺構 (石造遺構)、石列遺構、及び積石塚が主として認められた。このうち最も多かったのは遺物散布地と各種矩形・円形遺構であり、それぞれ 20 地点以上に上る。これとは対照的に、採集遺物の相対的多さと地表に露出した遺構から居住

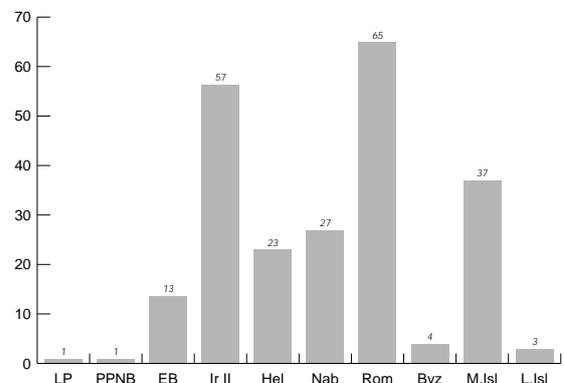


図2 時期別登録遺跡数 (2011年夏季及び2012年春季調査)

地と確認できた遺跡は僅か3地点にとどまった。以下、登録地点を種類別にもう少し詳しく記述していく。

### 6. 1. 居住地・逗留地 (Settlement)

今季調査では居住地あるいは逗留地としての機能が推定されたのは3地点のみであり、前回調査と合わせても4地点のみであった。第7地区の07011及び07012地点は隣接している。07011地点は07012地点の北、丘陵を下がった平坦地に位置している。同地点は1 haの規模を有しており、遺跡のほぼ中央に南北30 m、東西25 mの石灰岩の角礫(30~40 cm大)を積んだ矩形遺構が構築されている。この遺構の南端部では、2本の仕切り壁が東西に造られており、2つの細長い空間を作り出している。また、上記遺構の外壁に直交する形で幾つかの石壁が取り付けられ、東側斜面下に向かって延びている。上記遺構内からは、前期青銅器時代(EB II期)、ナバテア時代、ローマ時代の土器が主として採集された。

07012地点は、07011地点のほぼ真南の小丘上北半部に位置している(図3)。遺跡規模は1.2 haあり、全体のプランは判らないものの、20~40 cm大以上の石灰岩角礫を用いた5 m四方程度の矩形遺構が所々連結して認められた。同地点からの表採遺物の多くはEB II期に位置づけられると考えられる土器片と鉄器時代II期の土器片により占められるが、ローマ時代の土器片も少量のみ含まれる(図5)。

05003地点は、タルタル川南上流域右岸の小高い丘陵上に位置し、遺跡規模は約1 haを測る(図4)。丘上では石列等の遺構はほとんど認められないが、南半部で西から東にかけて遺跡を囲うように外面が平坦に揃えられていないやや造りの悪い石壁(残存高1.2 m、40 cm大の石灰岩角礫を利用)が構築されており、また、南東端でも下段に80 cm大の加工された石灰岩角礫を配し、その上に40 cm大の加工された石灰岩角礫を積んだ、外面が平坦に揃った造りの良い石壁(残存高1 m)が先述の遺構とは独立して認められた。この

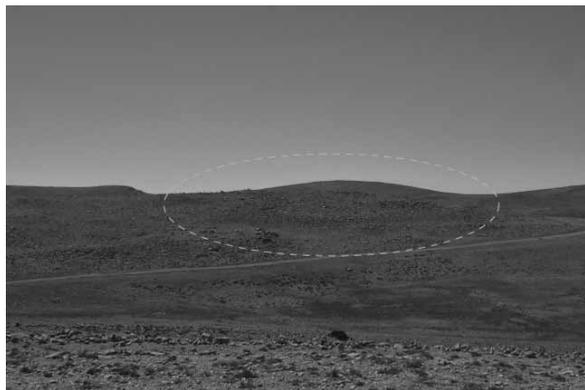


図3 07012地点遠景(東から)

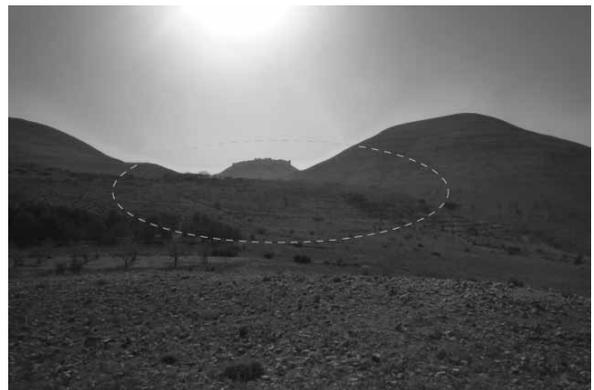


図4 05003地点遠景(南から)

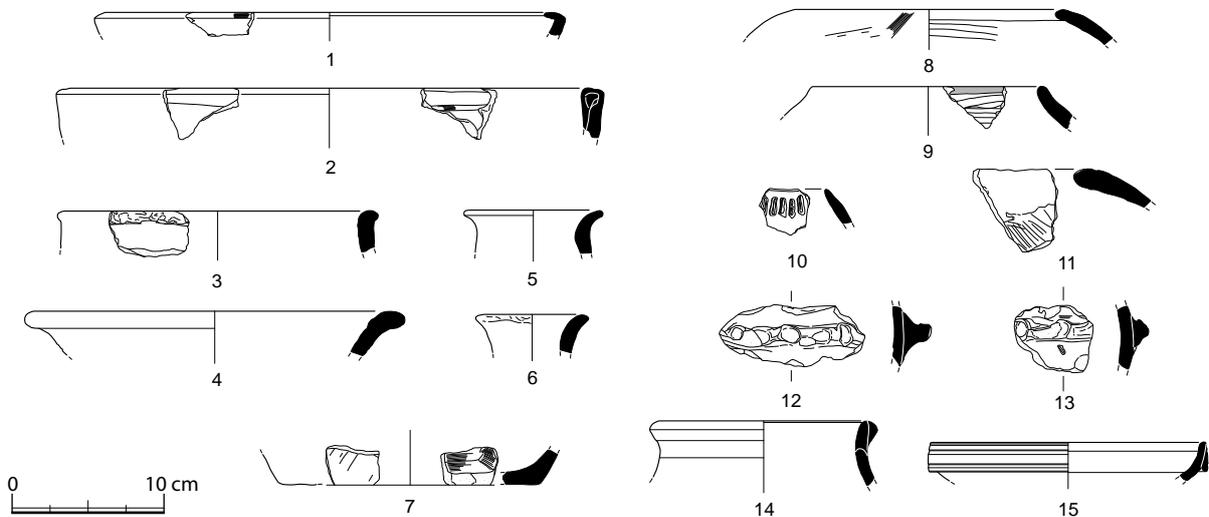


図5 07012地点採集土器(1-13:前期青銅器時代;14-15:鉄器時代II期)

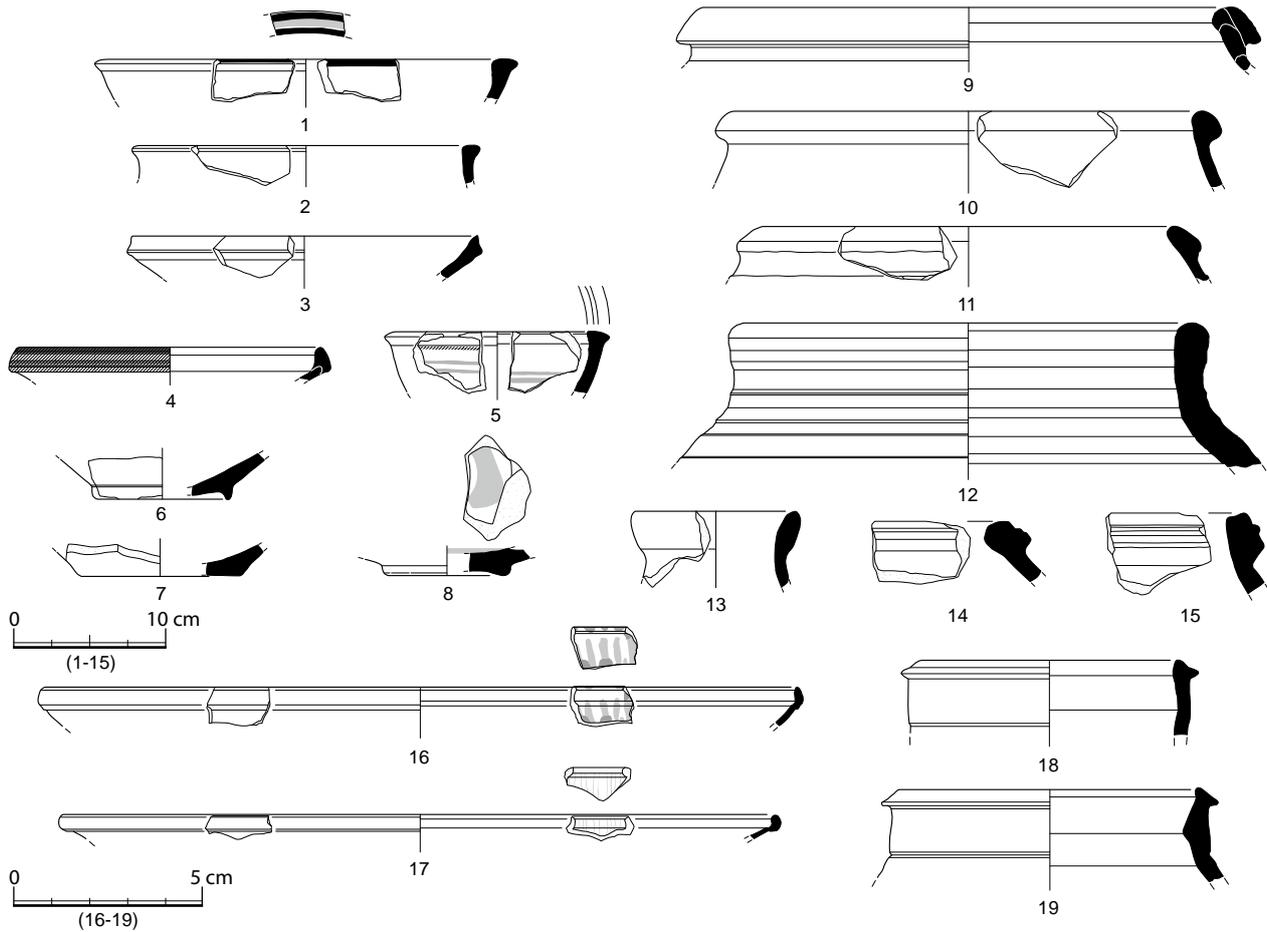


図6 05003 地点採集土器 (1-15: 鉄器時代Ⅱ期; 16-19: ナバテア時代)

遺跡ではかなり多くの遺物を採集することができ、鉄器時代Ⅱ期、ヘレニズム時代、ナバテア時代、ローマ時代、中期イスラーム時代の土器が確認された(図6)。このうち特に鉄器時代Ⅱ期とローマ時代の土器片が採集遺物の大多数を占めている。ローマ時代の遺物の中には、西方からの搬入品であるシギリタ土器(Terra Sigillata) 1片も含まれていた。また、時期不明の鉄滓が2点見つかり、小規模な金属生産活動も行われていた可能性が示唆される。とはいえ、地表で認知できる遺構の少なさから、同地点では恒常的な居住が行われた訳ではなさそうである。

## 6.2. 遺物散布地 (Artifact scatter)

遺物散布地は今季のみで31地点、これまでの調査で総計41地点を数える。このうち9地点では積石塚が見られた。地域別に見ると、重点的踏査対象であった第4地区において24地点と圧倒的に多く、第6・7地域での各6地点がこれに続く。以下、時代別に見ていく。

前期青銅器時代(以下EB期)の遺物は、これまで9地点において採集されている。今季調査では7地点が新たに確認されたが、このうちいずれも第4地区に所在する6地点(04011、04012、04066、04070、04071、04074)において、当該期の土器片が主体的に採集された。特に04011地点では、EB期の土器片が多量に採集された。同地点は、第4地区北東端のプスタン川下流西岸に広がる緩斜面上(海拔標高772m)に位置しており、約0.4haの面積を占める。現在は一部が耕作地として利用されており、周囲に遺構の痕跡は認められない。遺物のほとんどを占める土器片には、直線器壁鉢(V-shaped bowl)や末端に押捺が施されていない棚状把手片が含まれており、全体としてEB I期前半(EB IA期)の様相を示している。同地点の東隣、北側のナヘル川に舌状に突き出た小丘上でも、比較的少ないながらも同時期の土器片が採集されている(04012地点)。その他の地点は全てプスタン川に北西方向から注ぐ小支流の上流部、すなわち南西のより高地(海拔標高1100~1300m)に位置しており、EB I期に位置づけられうる土器片が採集された。例外とし

て、04074 地点では口縁外側に波状把手が貼付された特徴的な鉢形土器が採集されたことから、EB IV 期に利用されていたと考えられる。

鉄器時代 II 期は 29 地点において確認されており、ローマ時代に次いで多い。今季調査では、前回既に登録されていた 5 地点に加えて、新たに 24 地点が確認された。これらのうち 7 地点 (04009、04013、04042、04091、06001、06012、06018) において、当該期の土器片が確実に主体的に採集された。中でも第 6 地区に位置する 3 地点からは数量・割合共に多くの当該期の土器片が採集されている。06001 及び 06012 地点はいずれもブスタン川上流部北岸の丘陵上平坦面及び緩斜面に位置しており、それぞれ 0.5 ha 及び 0.8 ha の範囲で遺物の散布が認められた。06018 地点は上記 2 地点から南へ 1.5 km 離れた第 6 地区西側台地上に所在しており、後述のようにヘレニズム時代及びナバテア時代の土器片が共に多く採集された。したがって、当該期の痕跡は第 6 地区において相対的に明瞭に認められることが判る。

ヘレニズム時代は 15 地点で確認されているが、当該期の遺物は 06026 地点においてのみ主体的に採集された。同地点は、ショウバック城北 1 km に位置する丘陵上緩斜面及び平坦面に所在し、約 0.4 ha の規模を有する。遺構等は周囲に見られず、土器片の散布のみが認められた。また、06018 地点では、大多数を占めないまでも高い比率で遺物を採集することができた。

ナバテア時代は 16 地点で確認されたが、06018 及び 06025 地点においてのみ当該期の土器片が主体的に採集された。06018 地点は、ムカライエ村を北西方向に見下ろす、第 6 地区西側に広がる丘陵上平坦面に位置し、約 0.5 ha の範囲に広がる。範囲内には 6 基の積石塚を伴う。同地点からはまた、鉄器時代 II 期の土器片も多く採集されている。一方、第 6 地区南、タルタル川北岸丘陵上平坦面に位置する 06025 地点は、ほぼナバテア時代のみ痕跡を示している。同地点はその範囲が約 2.2 ha とやや広いが、採集土器片数は比較的少ない。周辺に遺構は一切認められなかった。

ローマ時代は 37 地点において確認された。遺跡数としては最多であるが、当該期の遺物が一定数量で採集遺物全体の多くを占める地点は今季調査では 5 地点 (04009、02027、04026、04029、04032) にとどまっており、全体でも 12 地点 (前回調査地点：04002、04004、04006、04007、04008、07006、07007) を数えるに過ぎない。これらのうち 9 地点が第 4 地区に位置

している事実は、当該地区が今季の重点的調査対象であったことを考慮してもなお、同じ条件下にあった第 6 地区から同様の痕跡が認められないことや、上記地点の分布が第 4 地区の西側断崖付近に偏ることに鑑みて、ローマ時代の遺跡分布の特徴を少なからず示している可能性がある。今季登録地点のうち特に顕著であったのは 04026 地点である。同地点は北東のナヘル川に注ぐ支流の上流南岸、緩斜面上に位置しており、約 3 ha の範囲に遺物散布と石積が認められた。この遺跡で採集された遺物の多くはローマ時代の土器片であったが、これに次いで鉄器時代 II 期の土器片も多く採集された。

ビザンツ時代は少なくとも 2 地点において確認されているが、いずれにおいても当該期の遺物が採集遺物全体のうち大きな割合を占めてはいなかった。

中期イスラーム時代は、20 地点において確認されたが、ビザンツ時代と同様に、いずれの地点でも採集遺物の中で主体を占めてはいない。

### 6.3. 石造遺構 (Structural remain)

各種遺構は、今季調査では 24 地点において認められ、前回調査分 (04002、04003、04004) と合わせて計 27 地点で確認されたことになる (表 2)。地区別に見ると、第 4 地区において 12 地点が認められ、全体の約半数を占めている。これに次いで、第 6 地区では 9 地点が登録された。また、時期別に見た場合、鉄器時代 II 期とローマ時代が最多の 18 地点で認められ、中期イスラーム時代がこれに次ぐ。これに対して、前期青銅器時代とビザンツ時代の遺物は僅か 2 地点で採集されたのみであった。

本カテゴリーには、以下のように様々な種類の遺構が含まれている。

- 1) 円形遺構 (02021、02025、04024、04027、04041、04055、04086、04094、06041、06044、07013)
- 2) 矩形遺構 (02029、03001、04022、04041、04101、06008、06023、06030)
- 3) 半円形遺構 (01001、06037)
- 4) 小型矩形遺構 (06037)
- 5) 小型コ字形石造遺構 (06022、06042)
- 6) 円形・長方形に石灰岩を一段並べた小型石造遺構 (04100)
- 7) 巨石により構築された小型矩形遺構 (06009)

上記の諸遺構の分布には一定の特徴が見られる。まず、遺構として顕著に認識できる 1) と 2) は、丘陵尾根・



図7 04027 地点遠景（南西から）

頂部の平坦面・緩斜面や舌状台地に構築されるのが一般的である。前者は、概して直径5～20 m程度の規模を有し、石壁は20～40 cm程度の石灰岩角礫を1 m幅程度で1～2段程度乱雑に積み上げて構築されている場合が多い。この中で、04024 及び 04027 地点は他に構造がやや異なっており、石灰岩角礫を軽く積み上げて作り出した直径10～15 m程度の半円形状の平坦面の背後少なくとも10～15 mに亘り、40 cm大程度の石灰岩角礫が1～2 m程度の高さまで荒く盛り上げられている（図7）。この背後の積石遺構は元来何らかの構造物であった可能性があるが、現在ではそのプランを確認することができず、遺構全体の機能は不明である。これらはいずれも第4地区北部の緩斜面上に位置している。

後者は、一辺が概して5～20 mを測り、長方形プランを呈する遺構も認められる（04101）。石壁は、20 cm大程度の石灰岩角礫を1列・1段並べただけの簡素なもの（03001、04041、06008）から、幅1 m程度で20～40 cm大以上の石灰岩角礫をやや荒く積み上げたもの（02029、04101）まで見られた（図8）。このうち、丘陵頂部に位置する04101地点の長方形遺構（長さ10 m、幅6～7 m）は特に顕著であり、内部は少なくとも2部屋に仕切られていた。

上記以外の遺構のほとんどは小型で、6)を除いて、比較的大きめの石灰岩を1列並べてしっかりと構築されていた。一方、04100地点の遺構（長さ3.5 m、幅1～1.5 m）は、20～30 cm大の石灰岩角礫を1列・1段並べただけであり、規模や造りに鑑みて、実用的な機能を伴っていなかったと思われる。また、上記のうち06009地点の矩形遺構は、他に比べて大きな石材（80 cm大）を用いていること、そして、その平面形が不規則であること等から、やや特異である。



図8 02029 地点矩形遺構（北から）

#### 6. 4. 石列遺構（Stone alignment）

性格不明な石列遺構が、今季調査においてのみ計14地点において確認・記録された。地区別に見ると、この種の遺構は第2、第4、第6地区においてしか認められず、第6地区では最多の10地点が確認された。採集された遺物の時期を見ると、鉄器時代Ⅱ期、ローマ時代、中・後期イスラーム時代が認められるが、過半数の9地点が時期不明であった。

これら石列遺構は、その構築方法に従って以下の4タイプに分類される。

- 1) 高さ30～50 cm程度、幅30～40 cm、厚さ20～30 cmの石灰岩の立石を1列に並べた遺構（04014、04089、04090、06021、06034、06036）であり、全長17～144 mを測る。途中で直角に曲がるものもある（06003）。
- 2) 幅1～1.5 m程度、全長50～200 m程度で、両側に40～50 cm大の石灰岩角礫を並べて、内部に10～20 cm大の石灰岩角礫を充填したもの（06028、06038、06039、06045、06046）。なお、積石塚が接続するかあるいは近傍に所在する地点も含まれる。
- 3) 幅1～1.5 m程度、短くとも全長800 mに亘って大型の板状フリントを乱雑に軽く積み上げたもの（06019）（図9）。丘陵尾根に沿って構築される。一部では、板状フリントを3～4段重ねた箇所や立石列が見られた。近傍には、積石塚状の矩形・円形石積遺構（径4～8 m、高さ0.7～2 m）が少なくとも計4基確認された。
- 4) 20～40 cm大の石灰岩角礫を1～2段積んだもの（02022）。短いものは全長5～7 mであったが、より長いものは全長不明。

上記4タイプの分布傾向はあまり明瞭ではないが、1)は第4・6地区の境界一帯に、そして、2)は第6



図9 06019 地点石列遺構（南東から）



図10 06034 地点円形・方形掘り込み遺構

地区南西部に概して分布するということは指摘できよう。また、1)のうち第4地区に所在する遺跡は全て、丘陵尾根の緩斜面に構築されているということも見落とせない事実である。なお、1地点でしか確認されていない3)については、その一部が立石で構築されている点や丘陵尾根上緩斜面に構築されている点が第4地区の1)と類似しており、1)のヴァリエーションと捉えることもできるかもしれない。

#### 6.5. 岩盤掘り込み遺構（群）

今季調査時に上記のいずれの種類にも分類されなかった遺跡として、06034 地点が挙げられる。同地点は、第6地区西側台地上の緩斜面に広がっており、約4.4 haを占める。遺跡内には、所々に露出した石灰岩盤に10～40 cm程度掘り込んだ円形・矩形の各種遺構群と既述の立石列遺構が散発的に認められた（図10）。前者のような遺構は、前回までの調査では確認されていなかった。

また、岩盤を掘り込んだ訳ではないが、石灰岩の大石を削り貫いた大型矩形桶（04064地区、約2 m四方、深さ70 cm）も確認された。

#### 6.6. 積石塚（Tumulus）

2シーズンの調査の結果、積石塚として12地点を確認・登録した。同遺構は、1)何らかの構造物が見られること、2)内外部の石積構造が外側から確認できること、また、場合によっては3)埋葬部を狙った盗掘により石郭構造等が露出していることにより定義される。

確認数が少ないため傾向を抽出することは難しいが、第6地区にやや多く分布し、鉄器時代Ⅱ期、ローマ時代、中期イスラーム時代の遺物が採集された場合が相対的に多いとは言える。

以下、同遺構の形態分類を示した。

- 1) 円形（04034、04045、06018、06019、06021、06032、06033、05002）
- 2) 楕円形（06004、06018）
- 3) 円筒形（02020）
- 4) 長方形あるいは長円形（02010）

上記のうち最も一般的な1)は、概して直径5～8 m程度を測り、20～40 cm大の石灰岩角礫と土砂を高さ1～1.5 m程度まで積み上げて構築されている。



図11 06004 地点楕円形積石塚（北から）



図12 02020 地点円筒形積石塚（北から）

なお、盗掘を受けた 04045 地点では、頂部に矩形の石郭 (2 x 2 m) を認めることができた。この種の積石塚の周辺からは、とりわけ鉄器時代 II 期からローマ時代の土器が採集された。

2) は、1) に比べて規模が大きく、長さ 8 ~ 20 m 以上、幅 5 ~ 10 m 以上、高さ 1.5 ~ 2.0 m に及ぶ。06004 及び 06018 地点では、それぞれ 3 基及び 1 基の楕円形積石塚が認められた (図 11)。前者は、40 cm 大の石灰岩角礫を積み上げて周囲を構築し、内部に 10 ~ 20 cm 大の角礫を充填して構築されていた。外周は部分的に少なくとも 3 ~ 4 段程度残存していた。後者は、構築方法はほぼ同様と考えられるが、保存状態が悪く、外周の石積を明確には確認できなかった。上記 2 地点からは、鉄器時代 II 期及びナバテア時代の土器が比較的多く採集された。

02020 地点で 2 基のみ確認された円筒形積石塚は緩斜面状に位置しており、直径約 4 m、残存高約 1 m を測る (図 12)。比較的平たい石灰岩角礫 (長さ 20 ~ 40 cm、厚さ 10 ~ 20 cm) を丁寧に積み上げて構築されている。現在は斜面下側に崩落しており、保存状態の良好な箇所でも 5 ~ 6 段の石積が認められるが、元来はさらに高く積まれていたものと思われる。周辺では中期イスラーム時代の土器片が僅かに採集されたが、この遺構に伴うものかどうか検討の余地がある。少なくとも調査地内では同様のタイプが見つかっていないため、今後は周辺地域での類例を探る必要があるだろう。

最後に、02010 地点で確認されたタイプ (長さ 17 m、幅 2.5 m) は、東側に高さ 40 ~ 50 cm の立石を南北に 1 列配し、西側に 10 ~ 20 cm 大の石灰岩角礫を軽く盛ることで、長方形あるいは長円形の平面形を呈している。周囲で遺物は採集されなかったため、時期不明である。

## 7. 総括：遺跡分布の特徴

今季調査では、以下に示す幾つの特徴を把握することができた。

1) これまでの調査成果を総合すると、ローマ時代に次いで鉄器時代 II 期の痕跡を多く確認できた。また、今季調査で確認された地点に限ると、当該期の痕跡は計 51 地点において認められ、ローマ時代を僅かに上回っていた。鉄器時代 II 期の土器片は、特に遺物散

布地において多く確認されたが、建築遺構からも採集されている。上記遺跡の詳細な時期は採集遺物のさらなる分析によってのみ決定されることは言うまでもないが、周辺地域の研究成果に鑑みて、おそらくその大半が鉄器時代 IIC 期 (前 7 ~ 6 世紀) に属するものと推測される (cf. Herr and Najjar 2008)。

上記の傾向は、南隣するペトラ周辺のシャマーフ・アイル地域 (Shammakh-Ayl) において、中期旧石器時代、ナバテア時代、そしてビザンツ時代が圧倒的に卓越する一方、鉄器時代の痕跡が限定的にしか認められない状況とは著しく異なっている (Macdonald et al. 2010)。一方、西側断崖を下ったフェイナン盆地では既に鉄器時代 IIA 期 (前 10 世紀) から活動痕跡が認められるようであり (Herr and Najjar 2008; Barker et al. 1999)、鉄器時代を通じた遺跡数も EB 期とローマ・ビザンツ時代に次いで多い (Levy et al. 2001)。以上から、周辺地域をも含めた細分編年の検討と、徐々に南下してきたと思われる同時期の物質文化が当該地域に受容されていった歴史的・文化的背景を各地域の特性に応じて検討し、痕跡の多寡や編年上の差異に関する意義を見出す必要があるだろう。

2) EB II 期に属すると考えられる集落址 (07012) が存在した可能性がある。また、第 4 地区を中心に EB I ~ IV 期の土器散布地が少なからず見つかっており、これらも合わせると、調査地域には当該期の痕跡が比較的集中していることが判る。EB 期の痕跡は、西の死海地溝帯下のフェイナン盆地 (Levy et al. 2001, 2002) とペトラ近傍 (Lindner et al. 1990, 2001) を除いて、周辺の丘陵地・高地ではほとんど認められていないため、上記の成果はハサ川 (Wadi el-Hasa) 以南での重要な事例の一つと言えるだろう。ただし、EB 期の痕跡が認められたのは事実であるが、07012 地点の地表面で確認された矩形遺構が同時期に属するか否かは発掘調査によってのみ判断されることであり、現時点では集落の存在について可能性の域を出ない。

3) 短期逗留地の痕跡と考えられる遺物散布地が数多く認められた。全体の約 60% が第 4 地区に分布しているが、第 6 地区も同様の精度で調査されたことに鑑みて、元々集中的に利用されていたと考えてよいだろう。

4) 第 6 地区において、比較的多くの石列遺構が確認

された。特に、先述のタイプ2の石列遺構は堅牢な造りであり、耕作地や放牧地に関する単なる境界壁とは考えにくい。分布域に偏りも見られるため、その構築方法に着目して、他種類の遺構と併せて機能・時期を検討する必要があるだろう。

5) 今季調査ではEB期以前に属する積石塚は認められなかった。なお、2011年夏季調査では、唯一07004地区において当該期に属する複数の長円形積石塚が認められ、周囲からはEB II・IV期の土器が採集された(Fujii et al. 2013)。

## 8. おわりに

今季調査において、第7地区を除く西半部の分布調査はほぼ完了した。次回調査では、東半部を網羅し、本調査対象地域における考古遺跡のドキュメンテーション作業に一通りの目処を付け、当該地域の文化資源の活用に着目できる状況を創出していくことが望まれる。

### 註

- 1) 第1次調査については正規の記録が存在しないため、上記の登録地点総数には加えていない。
- 2) 1つの地点で2つ以上の種類が確認された場合に各々についてカウントしたため、表2中では総計と数値が一致しない箇所が存在する。

### 引用・参考文献

- Barker, G.W., R.B. Adams, O.H. Creighton, D. Crook, D.D. Gilbertson, J.P. Grattan, C.O. Hunt, D.J. Mattingly, S.J. McLaren, H.A. Mohammed, P. Newson, C. Palmer, F.B. Pyatt, T.E.G. Reynolds, and R. Tomber 1999 Environment and Land Use in the Wadi Faynan, Southern Jordan: The Third Season of Geoarchaeology and Landscape Archeology (1998). *Levant* 31: 255-292.
- Dubis, E., M.A.A. Marahlah, and S. Nawafleh 2004 Two New Dolmen Fields in the ash-Showbak Area. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 48: 15-24.
- Fujii, S. 2007 Wadi Badda: A PPNB Settlement below the Fjayj Escarpment in Southern Jordan. *Neo-Lithics* 2/07: 19-23.
- Fujii, S., F. Abyudanah, and M. Tarawneh 2011 North Shawbak Archaeological Project (NSAP): a Preliminary Report on the First Field Season, 2010. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 55 (in press).
- Fujii, S., M. Yamafuji, and Y. Arimatsu 2013 A Preliminary Report of the Shawbak North Archaeological Project (SNAP), 2011 Sum-

mer. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 56 (in press).

- Herr, L. and M. Najjar 2008 The Iron Age. In R.B. Adams (ed.), *Jordan: An Archaeological Reader*, 311-334. London and Oakville: Equinox.
- Levy, T.E., R.B. Adams, and R. Shafiq 1999 The Jabal Hamrat Fidan Project: Excavations at the Wadi Fidan 40 Cemetery, Jordan (1997). *Levant* 31: 293-308.
- Levy, T.E., R.B. Adams, A.J. Witten, J. Anderson, Y. Arbel, S. Kuah, J. Moreno, A. Lo, and M. Wagonner 2001 Early Metallurgy, Interaction, and Social Change: The Jabal Hamrat Fidan (Jordan) Research Design and 1998 Archaeological Survey: Preliminary Report. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 45: 159-187.
- Levy, T.E., R.B. Adams, A. Hauptmann, M. Prange, S. Schmitt-Strecker, and M. Najjar 2002 Early Bronze Age Metallurgy: A Newly Discovered Copper Manufactory in Southern Jordan. *Antiquity* 76: 425-437.
- Lindner, M., E.A. Knauf, and J.P. Zeitler 1990 Es-Sadeh- A lithic - Early Bronze - Iron II (Edomite) - Nabataean Site in Southern Jordan: Report on the Second Exploratory Campaign, 1988. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 34: 193-237.
- Lindner, M., U. Hübner, and H. Genz 2001 The Early Bronze Age Settlement on Umm Saysaban, North of Petra (Jordan) and its Topographical Context, Report on the 1998/1999 Survey. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 45: 287-310.
- Macdonald, B., L.G. Herr, M.P. Neeley, T. Gagos, K. Moumani, and M. Rockman 2004 *The Tafila-Busayra Archaeological Survey 1999-2001, West-Central Jordan*. Boston: American Schools of Oriental Research.
- Macdonald, B., L.G. Herr, D. Scott Quaintance, and H.M. Lock 2010 The Shammakh to Ayl Archaeological Survey, Southern Jordan: Preliminary Report (First Season 2010). *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 54: 329-344.
- Macdonald, B., L.G. Herr, D. Scott Quaintance, G.A. Clark, and M.C.A. Macdonald 2012 *The Ayl to Ras an-Nzqab Archaeological Survey, Southern Jordan (2005-2007)*. Boston: American Schools of Oriental Research.
- Miller, J.M. (ed.) 1991 *Archaeological Survey of the Karak Plateau*. Atlanta: American Schools of Oriental Research.
- Rollefson G. 1981a A Lower Paleolithic Surface Site near Shobak, Wadi El-Bustan, Southern Jordan. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 25: 153-170.
- Rollefson G. 1981b The Late Acheulean Site at Fjaje, Wadi El-Bustan, Southern Jordan. *Paléorient* 7/1: 5-21.
- Rollefson G. 1985 Late Pleistocene Environments and Seasonal Hunting Strategies: A Case Study from Fjayj, near Shobak, Southern Jordan. *Studies in the History and Archaeology of Jordan* 2: 103-107.

Scheltema, G. 2008 *Megalithic Jordan: An Introduction and Field Guide*. Amman: American Center of Oriental Research.

UNESCO – Cairo Office 1996 *Vegetation of Jordan*. Cairo: Regional Office for Science and Technology for the Arab States.

Whiting, C.M., J. Fraser, T. Jakob, H. Miller, and I. Kehrberg 2008 The First Preliminary Report of the South Jordan Iron Age II Survey and Excavation Project (SJIAP): the 2004, 2005 and 2006 Seasons of Excavation at Khirbat ad-Dabba. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 52: 255-278.

Whiting, C.M., J. Fraser, T. Jakob, H. Miller, and I. Kehrberg 2009 The Second Preliminary Report of the South Jordan Iron Age II Survey and Excavation Project (SJIAP): the 2004, 2005 and 2006 Seasons of Surface Survey. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 53: 275-296.

藤井純夫・足立拓朗・山藤正敏・有松唯 2013 「ペトラ後背地の居住史—ヨルダン南部ショウバック地域の第1-4次分布調査（2010-2012）—」『平成24年度 考古学が語る古代オリエント 第20回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会。